



# 『これでも罪を問えないのですか!』——福島原発告訴団50人の陳述書

〔福島原発告訴団編・金曜日出版発行・800円＋税〕

## 『原発再稼働絶対反対』

〔再稼働阻止全国ネットワーク編・金曜日出版発行・800円＋税〕

〈3・11〉原発震災以後の、拡大し深化し続けている反(脱)原発運動のうねりがうみだした2冊の本をここで紹介する。

一つは、「福島原発告訴団編」の『これでも罪を問えないのですか!』福島原発告訴団50人の陳述書である。

「まえがき」で落合恵子は、こう書いている。「この陳述書に記されている言葉のひとつひとつが、言葉にはできなかった揺れや交錯するさまざまな感情が、福島の一とたちの悲しみであり、憤りであり、無念さである。それらのどれひとつにさえ、この国は、事故を起こした東京電力は向かい合っていない。応えてはいない。」



「『言いたいことはひとつだね……もとの暮らしを返せ……それだけだ』。日々

仮設住宅から通い、野馬追の馬にやる飼葉を切りながら、そう言ったひとつの掠れたつぶやきをわたしは忘れぬ。だからこそ、せめて、とわたしは要求する。／人の心をもって、向かい合うことを。／これは『お願い』ではなく『要求』である」

人の心をもって、憤りと無念の言葉に向かいあわなければならぬのは、告発されている(原子力ムラ)の住人たちだけではなく、私たち一人一人である。多くの人々が、命を奪われ、生活をまるごと破壊され続けている福島の実情から発せられる具体的な声。こんな被害をうみだした人々(責任者)が何故、裁かれないのか、という怒り。被害者が自ら立ち上がって発した、この声を共有しない原発運動はインチキだ。読み終わって、そういう思いを強くした。

ラストに「裁かれる東京電力と原子力ムラ」というルポライター明石昇二郎の「告訴団」の活動の軌跡を整理した論文もそえられている。そして団長の武藤類子「あとがき」には、こうある。

「私たちは馬鹿にされて生きていてはいけません。今この世界を変えていかなければなりません」

無責任国家・企業の責任をキチンと問いつける作業なしには、日本社会が「変わる」とはありえない。「50人の陳述」全体に、そういうメッセージがみなぎっている。

安倍政権は、福島の、こうした状況をその

ままに、なんと原発再稼働へ向けて暴走しだしているのだ。

もう一つの「再稼働阻止全国ネットワーク編」の『原発再稼働絶対反対』には泊・六カ所・東通・女川・福島第一・柏崎刈羽・東海第二・横須賀(原子力空母)・浜岡・志賀・ふげん・もんじゅ・伊方・玄海・川内・島根・大間原発をめぐる状況と反対運動の展開が、現地の人々のナマの声のレポートとしてつめこまれている(主に〈3・11〉以後のそれ)。

「まえがき」に収められた、このネットワークの結成宣言(2011年11月10日)には、こうある。

「しかし、まちがいに準備されている原発再稼働の嵐のような攻撃に抗するためには、各地一つ一つの闘いが孤立してたたきつぶされてしまっていないといけない。各地の再稼働をストップする闘いを結んで、原発ゼロ社会を実現するという一点で結びついた全国的な(組織)運動」こそが今つくりだされなければならないはずだ。それは各地の特殊な条件をふまえた対等・平等な運動の連合であり、力づよい運動経験の相互共有の場所でなければならぬ。

各地の闘いを「結ぶ」「力づよい運動経験の相互共有」のプロセスが進んでいることを実感させるパンフレットである。

必読といっても、いいすぎではない2冊である。

天野恵一(あまの・やすかず/本誌編集委員)